

AUC-GS学習モデルに基づくオンライン版エクササイズへの興味と活用の認識

Cognition of Interest and Utilization for Online Exercises  
Based on the AUC-GS Learning Model

田 中 共 子  
TANAKA, Tomoko

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第55号 2023年3月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.55 2023

# AUC-GS学習モデルに基づくオンライン版エクササイズへの 興味と活用の認識

田 中 共 子\*

## 目次

1. はじめに
2. 方法
  2. 1 参加者
  2. 2 内容
  2. 3 教育の形態
  2. 4 測定と分析
3. 結果
  3. 1 興味
  3. 2 活用
4. 考察

## 1. はじめに

AUC-GS学習モデル（田中・中島，2006）（表1）は異文化間教育の枠組みとして提案されたもので、文化や異文化に関する気付き、理解、対処の三段階と、対象となる現象の文化一般、文化特定のレベルをかけあわせて、合計6セルのコンテンツを学ぶ概念モデルである。セルの意図と重なるエクササイズを選択的に配し、討論や講義を組み合わせる参加型の教育に用いられている。多様な教材を組み合わせる教育を構成するのに有用な枠組みであるが、心理学の技術を取り入れた行動レベルの学習が最終段階に置かれる点にその特徴がある。多様な文化の存在に気づき、自己と他者におけるその影響を読み解き、異文化接触の心理的動態を理解して認知行動的な対処を学ぶことで、一連の異文化間教育が構築される構成となっている。

これまでは留学生や日本人学生、両者の混合クラスで行われた対面形式の実践に関する報告がみられるが（田中ら，2006；Tanaka，2012；田中，2015）、本稿ではオンライン形式の試みに焦点を当てる。「異文化接触の心理学」と題したこの教育的試みは、AUC-GS学習モデルに基づき、異文化対応力の涵養を視野に入れながら、複数の文化が接触する動的な心理現象を学ぶためにデザイン

---

\* 岡山大学大学院社会文化科学学域教授

表1 AUC - GS学習モデルによる学習構造

		レベル	
		文化一般	文化特定
段階	Awareness 気づき	AG 異文化の存在への気づき	AS 自文化を含む特定文化の存在や影響への気づき
	Understanding 理解	UG 異文化接触一般現象の知識と理解	US 特定文化における適応・不適応現象や特定文化自体の理解
	Coping 対処	CG 異文化接触一般に求められる対応の仕方の原則	CS 特定文化の文化的特徴に関わる対応の仕方

された、参加型の学びである。それがオンラインの形態で実施された際の反応についてはまだ報告が乏しく、詳しいことは分かっていない。本稿では、学習者はこの教育を体験して、内容のどこになぜ興味を持ったか、各回の内容をどう活用できると認識したかを学習者への問いとして、その反応についてキストマイニングによる内容分析を行ったので報告する。主たる狙いは、セルの意図に対応させて採用した個別のエクササイズに向けた、学習者の興味の所在と評価を探ることにある。

なお、この試みでは多様なフィードバックを得たことから分析項目は多岐にわたり、一報に全てを収容できなかった。各回の学びの認識と、全回をまとめた学びの認識と活用の認識、課題への反応に関する分析など、教育の効果を中心とした検討については、報告を別稿に譲る（田中、2022）。

## 2. 方法

### 2. 1 参加者

X大学に学ぶ日本人学部生22人（男性8、女性12、他2）。

### 2. 2 内容

20XX年度に60分×2枠×全8回の構成で、AUC-GS学習モデルの6セルに対応する以下のエクササイズを順に7回実施し、討論や講義を行った後、8回目に自作エクササイズ案の発表を行った。

AGセル：認知地図（田中・中野、2016）。ASセル：世界各地のIBM社員の価値観調査に基づく移動課題と染色工場の例題（ホフステードら、2013）。

UGセル：シミュレーションゲーム Back to Back（八代ら、2009）。

USセル：在日外国人と帰国子女の二人の大学生の交流を描いた、「一期一会 キミにききたい！！：日本で居場所を探す話@日系ブラジル人3世の生き方」（NHK教育2008年放送）の録画（2008年NHK放映）を視聴して事例分析。

CGセル：日本人ホスト向け多文化対応に関する文化アシミレーター（大橋ら、1992）とその場面を使ったロールプレイ。

CSセル：日本人学生向け在日ムスリムに関する文化アシミレーター（中野，2016；中野・田中，2015，2019）とその場面を使ったロールプレイ、および在米日本人留学向けの異文化間ソーシャルスキル学習（田中，1994）。

### 2. 3 教育の形態

オンライン教育システムで教材配布、連絡、課題回収、アンケートを行い、同期型のライブ講義を行った。情報の学術的な分析への協力を依頼し、プライバシーの保護と不利益なく協力をやめる自由、研究の目的と方法を説明して了解を得た。

### 2. 4 測定と分析

学習者から得た情報のうち、本稿では最終回末に尋ねた「最も興味深かったこととその理由」（興味）と、各回末に尋ねていた「授業で学んだことを今後どう生かせるか」（活用）の自由記述を分析の対象とした。興味の所在と活用可能性の認識を探る意図から、各回の特徴に注目しながらKH Coder（樋口，2020）を用いてテキストマイニングによる分析を行った。

## 3. 結果

### 3. 1 興味

記述から文章数49、総抽出語1,713（うち使用647）、異なり語数425（うち使用306）を得た。言及されていた内容に対応する回を外部変数にした場合の、記述に用いられた語に関する共起ネットワークを図1に示す。ある語と別の語が共に使われる度合いが表現されている。この繋がり方をみながら、関連が

深い特徴的な語をたどると、第1回：認知地図は世界・自国、第2回：価値観調査は国・指標・数値・スコア・比較・考え方、第3回：伝達ゲームは自分・思う・考える・面白い・意外と・イメージ・個人・違い・

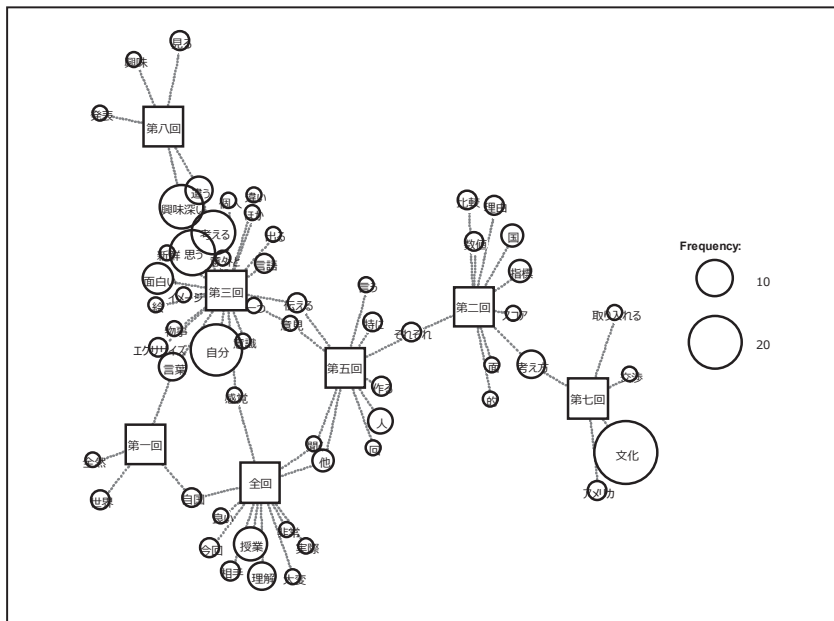


図1 「興味」の記述と対応回の共起ネットワーク

言語・伝える・新鮮・エクササイズ、第5回：ホスト対応は人・それぞれ・言う・聞く・伝える、第7回：アメリカ・文化・考え方・交流・取り入れる、第8回：まとめと発表は発表・見る・興味深い・違うであった。全回では、授業・理解・実際・相手・大変・良いなどであった。

KWICで文脈を確かめていくと、第1回では自国を機転とした世界認識を、第2回では各国の差がスコアで表現されることを、第3回は個人でイメージが違い意外と伝わらないことを、第5回はそれぞれの人への伝え方を、第7回はアメリカの考え方を、第8回は発表に見られる違いと授業全体を興味深く感じる傾向が認められた。第4, 6回は言及がなかった。

第3回関連の語が比較的多く、第3, 5, 2, 7回へ繋がる語の共有があり、第1, 7, 8と全回は末端に位置した。

### 3. 2 活用

記述から文章351、総抽出語13,367（うち使用5,174）、異なり語数1,195（うち使用974）を得た。実施回との対応分析を図2に示す。ある語がどの回の記述としてよく使われていたかが、実施回の表示と語の近さで表現されている。

実施回と近い特徴的な語を拾っていくと、第1回：認知地図は知る・気付く・認識・受け入れる、第2回：価値観比較は国・考え・価値・出会う、第3回：伝達ゲームは自分・相手・心がける・実際・場面・説明、第4回：在日外国人事例は人間・講義、第5回：ホスト対応は人・違い・感じる・問題・伝える・行動、第6回：ムスリム対応は情報・活かす・接す・日本・当たり前、第7回：アメリカンスキルは主張・意見・言う・日本人・留学、第8回：まとめと発表は考え方・学ぶ・理解・文化・異なるなどがある。

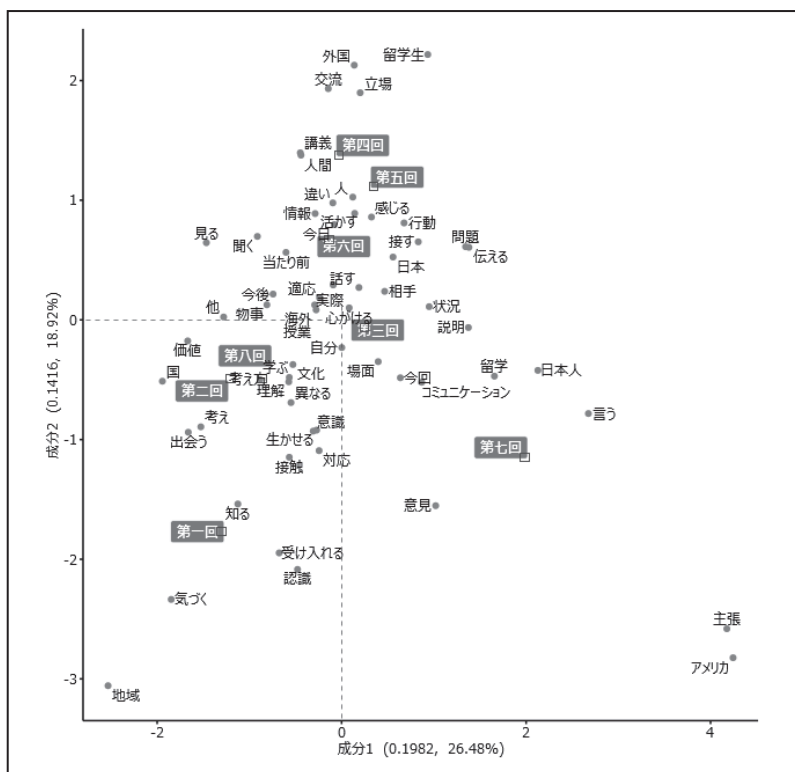


図2 「活用」の記述と実施回の対応分析

第7回：アメリカンスキルは主張・意見・言う・日本人・留学、第8回：まとめと発表は考え方・学ぶ・理解・文化・異なるなどがある。

KWIC機能で文脈を確かめつつ読み取ると、第1回は世界を再認識して異文化の受け入れに、第2回は異なる価値観と出会ったときに、第3回は実際の場面で相手への説明に、第4回は相手を一人の人間としてみて接する姿勢に、第5回は問題への理解と行動に、第6回は当たり前と思うことが異なるときの接し方に、第7回は留学して主張するときに、第8回は多様な考え方を理解するのに、活用の可能性を見いだす傾向がみられた。

図で端近なものはより特徴的とされるが、第1, 4, 7回が比較的該当する。中心に近いものはより一般的と解されるが、第3, 8回がそれに近い。なお配置の近い第4, 5, 6回は、活用の認識が似ている傾向を示している。

#### 4. 考察

「興味」の対象となったエクササイズは比較的分散しているが、意外性あるゲームや工夫の要るロールプレイなど能動的関与が注目される傾向があり、学習者の発表も注視されていた。「活用」の認識では、異文化の理解の仕方、受け止め方、対応の仕方に使える内容だったと認識していることが分かる。活用場面としては、外国人との邂逅や留学などによる渡航状況を念頭に置いている様子が伺われる。

学習者は、世界中の異文化の存在に視界が広がり、差異と問題発生の際序を理解し、要領を得て対応へと踏み出した体験だったと感じている。将来的な現実場面での異文化対応の可能性に関心と自信と期待が芽生えていることから、異文化接触の準備教育としての機能を指摘できよう。この教育は実渡航による留学の準備教育として使うことも考えられる。

本稿と同じ実践の学習者による別のデータから、エクササイズ構成の教育効果を探究したところでは、各セルの意図に沿った反応が得られたことが確認されている（田中、2022）。対面形式に限らずオンライン形式でも、狙った教育効果が期待できることが示唆される。対面に比してより適用範囲の広いオンラインによる参加型授業の活用は、今後の異文化間教育の形態に可能性を広げるものとなる。

#### 引用文献

樋口耕一 2020 社会調査のための計量テキスト分析・第2版－内容分析の継承と発展を目指して  
ナカニシヤ出版.

ホフステード, G.・ホフステード, G. J.・ミンコフ, M. (著), 岩井八郎・岩井紀子 (訳) 2013 多  
文化世界：違いを知り未来への道を探る (原書第3版) 有斐閣.

中野祥子 2016 日本人学生向けムスリム文化アシミレーター (科学研究費補助金 No.15H0345617  
成果公開) 岡山大学社会文化科学研究科・田中共子研究室.

中野祥子・田中共子 2015 日本人学生を対象としたムスリム文化アシミレーターを用いた異文化

- 間教育の試み 留学生教育, 20, 83-92.
- 中野祥子・田中共子 2019 日本人学生むけムスリム文化アシミレーターの改訂版を用いた異文化間教育の試み 文化共生学研究, 18, 53-66.
- 大橋敏子・近藤祐一・秦喜美恵・堀江学・横田雅弘 1992 外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック：トラブルから学ぶ異文化理解 アルク.
- 田中共子 1994 アメリカ留学ソーシャルスキル：通じる前向き会話術 アルク.
- Tanaka, T. 2012 A cross-cultural psycho-educational program for cross-cultural social skills learning to international students in Japan: Focusing on the AUC-GS Learning Model. Japanese Journal of Applied Psychology, 38, 76-82.
- 田中共子 2015 AUC-GS学習モデルに基づく日本人学生を対象とした心理教育的な異文化間教育の試み 異文化間教育, 41, 127-143.
- 田中共子・中野祥子 2016 異文化間教育の導入的エクササイズとしての認知地図に関する研究ノート 文化共生学研究, 15, 85-94.
- 田中共子 2022 AUC-GS学習モデルに基づく異文化間教育オンライン版の学びに関する検討 留学生教育, 留学生教育, 27, 76-83.

## 謝辞

本研究は、科学研究費補助金（21K02963）の助成を受けました。